

詩編 145 : 8～9

ルカによる福音書 15 : 11～32

「怒れる息子」

<神さまの喜び>

ルカによる福音書 15 章には、三つのたとえ話が語られています。それぞれ、失われたものを捜し出して、取り戻した人のお話です。

失われたものは、神さまから離れてしまった罪人のわたしたち。そして、捜し出し、取り戻して大喜びしているのは、父なる神さまであり、神さまに遣わされたイエスさまです。

罪人であるわたしたちが、神さまの御許に帰ること、神さまと共に在ることを、神さまは心から喜ばれるお方です。だから、わたしたちが罪を犯し、神さまから遠ざかり、離れてしまっても、神さまは熱心に捜し出して下さり、取り戻し、罪を赦し、御許に引き寄せて下さるのです。そして、わたしたちが御許に帰ったなら、それを心から喜ばれるのです。

この、神さまの喜びの中でこそ、熱心の中でこそ、憐れみの中でこそ。わたしたちは自分の罪に気付き、悔い改め、神さまに立ち帰り、救いに与ることが出来るのです。

<前回の放蕩息子>

さて、先週からその中の三つ目のたとえを聞いています。三つめは、小さなタイトルをつけるなら、「息子たちを愛する父親のたとえ」です。ここには、二人の兄弟が登場し、先週は放蕩する下の息子についての話に耳を傾けました。

下の息子は、父の財産を要求し、受け取るや否や、父から逃れるように異国の地に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くしました。そこに飢饉が起りましたが、自分勝手に生きてきた彼には、手を差し伸べてくれる者は誰もいません。どん底まで落ちて、最後には、食べるにも困るようになります。

そこで彼は、やっと我に返りました。自分の立場を思い起こし、自分が本当に生きるべき場所、生かされていた場所がどこであったかに気付いたのです。

彼は、父親の許では雇人でさえ沢山のパンをもらっていたことを思い起こしました。そうであるならば、息子の自分は、父の許にいた時には、いったいどれだけ満たされていたのか。父親に、どれだけ豊かに養われ、生かされていたのか。そのことに気が付きます。

それで、他に行くべき所もないので、雇人となってでも、父親のところに居させてもらおうと思い、帰ってくるのです。

父親の方は、下の息子が離れて行ってしまってから、大きな悲しみに暮れつつ、いつもいつも帰りを待っていました。そんなある日、ボロボロになって帰ってきた下の息子の姿を、

父親は遠くに見つけたのです。父親は、もう居ても立っても居られず、息子のところまで走り寄り、首を抱き、接吻し、すでに赦していることを伝えました。そして、雇人にするどころか、愛する息子として心から受け入れて、大喜びになって宴会を開いたのです。

父親の方は、いつでも下の息子を迎える準備が出来ており、赦すつもりでおり、ただひたすら、帰ってくるのを今か今かと待っていたのでした。

それが、「息子たちを愛する父親のたとえ」の前半です。

#### <怒れる上の息子>

さて、今日はその後半にあたる 25 節以下に注目します。ここには、上の息子、兄の様子が描かれています。

兄は、この日もまじめに畑仕事をしていたようですが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきました。僕に聞くと、財産を食いつぶして放蕩の限りを尽くしていた弟が、帰って来たというのです。

もしここで、家から聞こえてきたのが、音楽や踊りのざわめきではなく、父親の怒鳴り声だったら。弟を叱り倒している声だったら。それなら兄はきっと、弟が自分のやってしまった過ちの報いを受けるのは当然だ。放蕩し尽くして、財産をすべて失った挙句、おめおめと帰って来て、息子面出来ると思うな。そう思って、父親に同調したに違いありません。

ところが、僕は驚くことを言いました。「弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。」

兄は、これには納得できません。28 節には、「兄は怒って家に入ろうとはせず」とあります。兄は、怒ったのです。好き勝手やってきて、自分で身を滅ぼして、食うにも困って帰ってきた弟が、どうして歓迎されるのか。どうして父親は、喜んで受け入れて、豪勢な宴会まで開いてしまうのか。弟に甘すぎるのではないか。弟をえこひいきしているのではないか。

兄の怒りは、自分勝手すぎる弟への怒りと、それ以上に、そんな弟を赦した上にお祝いまでしてしまう、弟に甘すぎる父親への怒りだったでしょう。

わたしたちも、兄の立場を想像するなら、この非常識な父親の態度や、理不尽さに、怒りを覚える気持ちが、理解できるかも知れません。

さて、上の息子が怒っていることを知った父親は、家から出て来て、外に立ったままの息子の所に行って、彼をなだめようとします。

しかし、兄はここで、これまで真面目に父親に従って生きて来た自分に、父親は報いてくれない、という不満を訴え始めるのです。

#### <兄の本音>

兄は、父親に向かってこのように言いました。29 節「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友

達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」

この兄の言葉から、その人物像が見えてきます。彼は自分でこう言いました。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。」

彼は、とても真面目な人物です。父親の言いつけに背いたことは一度もない。そう自分で言い切る自信があるほどに、父親に忠実に仕え、なすべきことを、しっかりと行なってきたのです。どれだけ頑張って、どれだけ我慢をして、精一杯自分の時間をささげ、父親に仕えてきたか。

だから、彼は父親に訴えたいのです。「あなたの望むように、わたしは生きてきたではありませんか。わたしはあなたに完全に従い、あなたに咎められるところがないように、正しく生きてきたではありませんか。」兄は、自分がやってきたこと、自分の生き方が、父親の前に完璧だった、正しかった、と自負しています。

それなのに！「それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」

兄から見れば、取り返しがつかない程に失敗した、ダメで愚かな弟が、自分も受けたことがないような素晴らしい待遇を、父親から受けているのです。

こんなに頑張ってきた自分は、何もしてもらったことがないのに。こんなに正しく真面目に生きてきた自分が、子山羊一匹すらもらったことがないのに。まったくどうしようもない、「あなたのあの息子」が、遊び惚けて、財産を食いつぶして帰ってきて、どうして肥えた子牛をもらえるのか。

…兄は自分の弟のことを、「あなたのあの息子」と言いました。とても棘のある言い方です。あんな奴は自分の弟なんかではない、と言っているのです。兄は、帰って来た弟を受け入れていないし、認めていません。この言い方は、関係を絶とうとしていることの表れです。

兄は、こうして父親から良いものを受けている弟と自分を比べて、自分にはふさわしいものが与えられていない。父親からこれまでの努力や頑張りを評価されておらず、正当に報われていない。もらって然るべきものを受け取っていない、ということを主張するのです。

しかし、ここに、兄の本当の心の内が見えくるような気がします。

兄は、頑張ってきたのだから、自分は報いを受けて当然だ。この長年の父親に対する、忠実さや、仕えてきた労力に対して、父親は認め、ふさわしい報酬をくれて然るべきだ、と考えています。

ここから、実はこの兄が、父親の家で何年も仕え続けてきたのは、父親への愛や、思いやりによってではない、ということ。自分で望んで、喜んで、父親の許にいたのではない、と

ということが伺えるのです。

兄は、父親に仕えることは、自分を犠牲にすることだ、と感じているのではないのでしょうか。父親と共にいることは、彼にとって仕方なく、我慢しなければならないこと、だったのではないのでしょうか。

兄が家を出なかったのは、長男だったからかも知れません。世間的に、そんな自分勝手は許されないから、自分は弟と違って我慢し、忍耐し、父親にとって良い息子でいなければならないのだ、と考えたのかも知れません。

だから、その労力に対して、犠牲に対して、対価を得て然るべきだ。それに対する報いがあるって当然だ、という考えになるのだと思うのです。

さて、この兄の訴えは、父親からしたら、どうなのでしょう。

父親は、上の息子も、下の息子も、自分のすべてを与えて良いほどに愛しているのです。そして、彼らと共に生きていきたい。いつも一緒にいることが嬉しい、と思っているのです。

下の息子は、この父親の心を知らず、分かりやすく家を出て行きました。

一方、上の息子は一緒に生活してくれている。でも、父親と一緒にいるのが好きだから、父親を愛しているから、という訳ではなさそうです。彼の言葉尻からは、仕方がないから、決められているからそうしているのであって、喜んで父親に仕えているのではない、ということが伝わってきます。

それならば、父親にとっては、兄もまた、自分から遠く離れてしまっているのではないのでしょうか。一緒に家の中にもいるとしても、心が遠く離れているなら。父親の愛を受けらず、父親を愛していないなら。父親にとっては、兄も失われていると同じ状態なのではないのでしょうか。

<ファリサイ派の人々や律法学者たちに>

さて、ここで、イエスさまがこの 15 章のたとえ話を語られた相手を思い起こしたいのです。1～3 節にはこうありました。「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いました。そこで、イエスは次のたとえを話された。」

徴税人や罪人たちとは、当時のユダヤ人の間で、汚れた仕事をし、神さまの律法を守らず、救われる資格がない、救いから落ちている、と思われていた人たちです。

しかし、イエスさまは、彼らに神さまの救いへの招きを語り、彼らの仲間となり、彼らを受け入れておられました。

それに対して、ファリサイ派や律法学者たちが不平を言い出したのです。ファリサイ派や律法学者とは、神の律法を正しく守り、自分たちこそ救いにふさわしいと自負していた人々です。

だから、自分以外の、正しくない罪人たちを、どう考えても失格者である人々を、イエス

さまが受け入れ、神さまの救いへ招いていることが、彼らは許せなかったのです。やがて彼らは、イエスさまに激しい敵意を抱き、それは、やがて殺意になっていきました。

そんな彼らに、イエスさまは、この 15 章の三つのたとえを語られたのです。

罪人が一人でも悔い改めることを、神さまがどれだけ喜んでおられるか。どんな罪人であったとしても、その一人を、神さまはどれだけ熱心に捜し求め、見つけ出し、ご自分の許に取り戻されようとしておられるか。

そして、最後のたとえでは、父親から物理的に離れて行った弟と、父親から心理的に離れてしまっている兄、それでも、どちらの息子も深く愛している父親のたとえが、語られたのです。

神さまの目から見れば、徴税人や罪人と呼ばれ、人々から救われる資格がない、どうしようもない失格者だ、と思われている人々も。また、自分たちは熱心に神さまに従っており、神さまの御前に正しく歩んでいると自負している、ファリサイ派や律法学者たちも。どちらも、神さまから心が離れているのなら、神さまの愛を、救いへの招きを、しっかり受け取ろうとしないなら、失われているのと同じことなのです。

わたしたちもまた、神さまから離れて、自分勝手に放蕩し、滅びへ向かう、どうしようもない弟のような、救われる資格のないような、罪人でした。

そしてまた、わたしたちは、神さまに従っているかと思えば、いつのまにか、自分の正しさや真面目さによって、その恵みを受け取る権利があるのだと勘違いしてしまう。最初からずっと、すべてを赦し、すべてを与え、愛し尽くして下さっている、神さまの御心を見失い、蔑ろにしてしまっている。そんな兄になることもあり得るのです。

しかし神さまは、すべての者を、深く愛しておられます。その罪人一人一人を、確かに取り戻したいと願っておられます。イエスさまは、その父なる神さまの御心を、教えて下さったのです。「あなたもまた、失われており、あなたもまた、取り戻されたいと願われているのだ。あなたを見出すために、わたしは来たのであり、あなたが神さまの御許に心から立ち帰るなら、神さまは天をあげて、大喜びなさるのだ。あなたのために、祝宴が開かれ、あなたが、席に着くようにと招かれているのだ。」

#### <父親の許で>

さて、兄の話に戻りましょう。父親は、怒れる兄に対して、どうしたのでしょうか。

28 節には、家から「出て来てなだめた」とあります。弟が帰って来た時、まだ遠くにいたのに、それを見つけて走り寄ったように、兄のことも、父親は自分から迎えに出て来て、家に帰ってくるように、祝宴の席と一緒に着くようにと、招いたのです。

父親は、兄にこう語りかけました。31 節、「すると、父親は行った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当た

り前ではないか。』」

「お前はいつもわたしと一緒にいる」。兄は、一番良いものを、すでに受けているのです。兄は、父親の許で、これまでもずっと愛され、養われ、守られ続けてきたのです。

どうしようもない弟を、無条件で赦し、受け入れ、喜ぶような、親バカすぎるほどの父親の愛は。兄が嫉妬し、怒りを覚えるほどの、非常識ともいえる父親の愛は。当然、兄にも、これまで全く変わることなく、片時も欠けることなく、注がれ続けてきたのです。

兄は、父親に愛されてきたことに、生かされてきたことに、気づかなければなりません。

兄は父親の近くにいながら、この父親の思いを、愛を、受け止めていませんでした。食べ物があり、家があり、仕事があり、友達があり、満たされている日々の中で、その日々が父親の愛に支えられていることに、目を向けていなかったのです。

兄は、確かに父親の言いつけに背いたことはなかったかも知れません。

しかしこの父親の愛は、兄がまじめに働き、父親の言いつけをきちんと守るから、与えられてきたものではありません。父親はただ、この兄の存在そのものを喜び、愛しているのです。

そのことは、弟がまじめに従わず、言いつけを守らなくても、変わらず愛され続けていることから、分かります。

父親は、兄の存在も、弟の存在も、最初から、まるごと愛しているのです。

そして、その愛は、兄や弟の行いがどうであるとか、態度がどうであるとか、そんなことでは揺るがないし、変わらない愛なのです。

父親は息子たちに、ただこの愛を、受け取ってくれることを望んでいるのです。そして、いつも一緒にいることを、共に喜んでいきたいのです。愛の関係に生きること。ただそのことを、求めているのです。

この父親のような愛を、わたしたちもまた、神さまから受けています。神さまは、わたしたちが神さまの愛を受け止め、わたしたちもまた神さまを心から愛し、いつも一緒にいることを求めて下さり、それが、心からの喜びだ、と言って下さいます。

神さまは、わたしたちが何かを差し出した報いに、愛を与えて下さるわけではありません。わたしたちは、はじめから神さまの愛の中に置かれているのです。そして、その愛のゆえに、神さまは、何もないわたしたちを、むしろ負債を抱え、罪に捕らわれているわたしたちを、憐れに思って、はらわたがもだえる思いで、救い出して下さるのです。

神さまは一人一人を、ひたすら大きな愛で愛して下さっているのです。そして、神さまが愛によってなされることは、わたしたちの常識や、わたしたちが考える公平さや、正しさなんかには、収まりきらないのです。

自分と誰かと比べるならば、神さまが不公平に思えることもあるかも知れません。神さまが理不尽に思えることがあるかも知れません。でも神さまの愛が、そのように常識を超えた、

道理に合わないような、想像を絶するような愛でなければ、きっと、わたしたちの罪が赦されることもなかったはずです。

父なる神さまの、何がなんでも愛し抜いて下さる愛によって、世の常識を超えるような取り扱いをして下さることによって、わたしたちは、逆らっても、背いても、諦められることなく、見捨てられることなく、捜し求められ、見出され、御許に取り戻されたのです。

この非常識なまでの愛は、まさにイエスさまの十字架に現わされています。神さまがわたしたちを罪から解放し、ご自分の許に取り戻されるために、御子を遣わし、その命さえ、惜しまず与えて下さったのです。このような神さまが、他におられるでしょうか。

このような愛によって、わたしたちは皆、イエスさまの十字架と復活の救いの恵みを告げ知らされ、神さまの喜びの交わりの中で生きるように、と招かれているのです。

そして神さまは、その罪人の一人でも帰ってきたなら、大喜びなさる。そして、祝宴をお開きになり、みんな一緒に楽しみ喜んでくれ、と言われるのです。

兄にも、弟のことを一緒に喜ぼう、と招かれる。神さまは、ご自分との喜びの関係と共に、兄弟どうし、わたしたちどうしもまた、喜びの関係に生きることを望んでおられます。

わたしたちは、父なる神さまのような愛をもつことは出来ません。嫉妬したり、怒ったり、不平を言ったりしてしまいます。でも、一人の罪人の救いを共に喜ぶということは、わたし自身もまた、罪人であったのに、この神さまの愛によって赦され、喜んで受け入れられ、生かされている者であったことを思い起こすこと、確かにされることなのです。

わたしのものは全部お前のものだと言って下さり、共に在ることを喜んで下さる。

わたしたちは、この神さまの大きな愛に、共にあずかって生きており、この恵みを共に見つめることによってこそ、互いにもまた、赦し合い、愛し合う関係を築いていくことが出来るのです。

わたしたちもまた、今、この神さまの大きな喜びの中に、共に置かれていることを見つめたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、わたしたちの思いを遥かに超えた愛を、注ぎ続けて下さっています。

それなのに、ある時は、あなたに背いて遠く離れ、またある時は、あなたの側にいると思  
い込みながら、心が伴っていないわたしたちを、どうかお赦し下さい。

あなたは、御子である十字架と復活のイエスさまを遣わして下さい、どれだけわたした  
ちを愛しているかを示し、また罪の赦しを与えて下さることを示し、御許へ招いて下さいま  
した。

あなたの招きに、お応えする者とならせて下さい。用意して下さいった祝宴の席に着かせて  
下さい。あなたと共にあることの幸いを知り、また兄弟姉妹と、あなたにあって共にあるこ  
とを喜ぶ者として下さい。

イエスさまの御名によって、お祈りいたします。アーメン